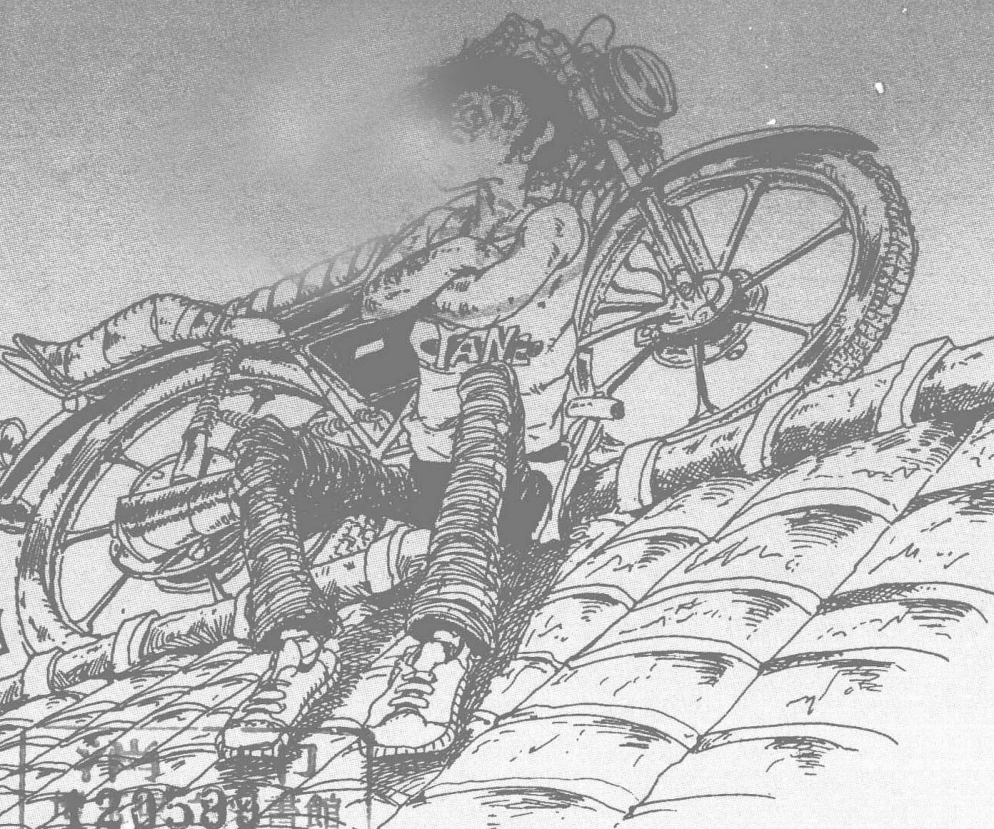


津山絃一

屋根屋狂躁曲



屋根屋狂躁曲



著者略歴

昭和19年、北九州・若松生れ。
43年、日大芸術学部映画学科卒業後、
テレビCFプロダクションにカメラ
マンとして入社。46年、退社して渡
欧、イギリスを皮切りに、東独、デン
マーク、ポーランド等を転々とする。
49年帰国、屋根職人として生計をた
てるかたわら、執筆活動を開始。51
年「13」で第2回「問題小説」新人
賞を受賞、本格的なブラックユーモ
アの書き手として注目される。
著書に「ブルシャンブルーの奇妙な
黄昏」「ハンブルグ物語」(徳間書店)
「時のない国 その他の国」「人騒がせ
な死体たち」(集英社)等がある。

屋根屋狂躁曲

一九八三年一月二五日 第一刷発行

定 価 八八〇円

著 者 津山紘一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

印刷所

一〇一 東京都千代田区二ツ橋二一五一一〇
電話(〇三) 二三八一二八四二(出版部)
二三八一二七八一(販売部)
凸版印刷株式会社

0093-775034-3041

© K. TSUYAMA, Printed in Japan, 1983

検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えしませう。

屋根屋狂躁曲——目次

春

- 1 英雄色を好み、屋根屋はソバを好む 8
2 ぼくは如何にして屋根屋を天職に選んだか？ 23
3 屋根屋の郎党は宮殿に住む 33

- 4 良太郎は屋根の上でラジオ体操をする 40
5 会長はテレビとビデオを三台ずつ買う 46

- 6 屋根屋、二人のアメリカ娘に初めての体験をさせる 53
7 屋根屋、大きなフランス人形を買う 62

- 8 福田君は沖縄を旅して伴侶を得る 75
9 インテリの朝は、一杯の熱いコーヒーから始る 81

夏

- 1 良太郎、屋根の上で目玉焼をつくる 90
2 暑さは女を狂わせ、屋根屋を喜ばせる場合もある 94

秋

3 雨の日、良太郎は鼠を撃つ 99

4 屋根屋、それぞれの役職につき、便所を修理する 109

5 良太郎、結婚して無一文になる 117

6 闘争は勝利するためにある 125

7 屋根屋、またクロスオーバーする 139

8 屋根屋、はじめての壁を芸術的に塗る 150

1 大事故が起る屋根には、赤ん坊が登っている 156

2 ぼくと福田君も、ついに正義さんの境地に達する 159

3 田中さんは空飛ぶ絨緞に乗った 166

4 整備兵もまた高いところを好む 170

5 枝豆の代価は高くつく 176

6 恐怖の助っ人、ついに登場する 180

7 地震も屋根屋には優しい 188

8 ぼくは婦人警官の乳首を指で突く 193



- 1 冬將軍がやってきた 210
- 2 ピアノを弾く美少女もまた、屋根屋の天敵である 213
- 3 助っ人、居座る 217
- 4 ヤクザの天敵は屋根屋である 224
- 5 ぼくは完全犯罪を目撃し、警察へ行く 229
- 6 助っ人、惜しまれつつ辞職する 241
- 7 年をとらない方法もある 254
- 8 田中さんは足が長くなって戻ってきた 262

そして 269

屋根屋狂躁曲

春



1 英雄色を好み、屋根屋はソバを好む

「お茶にしてくださいな」

地上で夫人の甲高い声がした。

「はアい」

待ってましたと福田君が返事をした。

「もうそんな時間か」

ぼくは腕時計を見た。ガラスに無数の傷がついたタイメックスの針は三時をさしていた。瓦を置いて、思いきり腰を伸ばすと気持ち良かった。

切妻屋根の傾斜に沿って半分ほど新らしい瓦がならび、隣家の巨大な櫓けやきから洩れる午後の太陽が、涼しげな影を落していた。

「行くか」

横で良太郎がいった。

ぼくたち三人は野地板を踏んで屋根を伝い、さらにまだ手つかずの古屋根を幾つか越えて、アルミ

の二段梯子で地上に降りた。高い所に馴れていても、やはり地球を踏みしめると安心する。

母屋に続く陽当りの悪い路地では、緑色の葉をつけた雑草の間から、タンポポが黄色い花をのぞかせていた。

ここは東京のどまんなか、神田の本通りから道一本だけ離れた住宅街だった。

「やア、どうもご苦労さん」

裏庭にまわると、この家の持主らしい初老の男が人なつこく笑いかけた。

ぼくたちが、黒っぽい背広を着、黒いネクタイを締めた男をながめていると、

「いやア、葬式でね。アハハハ」

男は甲高い声で笑い、薄い唇のあいだから、みごとにならんだ金歯を光らせた。

まるで獅子頭だな、と思ったとき、

「どうも御愁傷さまです」

良太郎がしおらしく頭を下げた。

「アツハハハ」

男はなおも金歯を光らせて、「そこで手を洗いなさい」

南の縁側に面した小さな庭に、階段のような花台が設けられ、赤い花をつけたシクラメンの鉢の横で、朝顔が二十センチほど伸びていた。幾つかの盆栽を雑然とならべた棚、古くなった熱帯魚の水槽のなかで、パセリが濃い緑の葉をつけ、脇に散水用の蛇口があった。

「だいぶかかりそうかね？」

「やはり五日はかかるでしょう」

良太郎は洗い終えた顔を何度か横に振り、あらかた水分を乾燥させ、次にジーパンから赤っぽいチエックのワークシャツの、まだ汚れてない部分を引きだして顔を拭き、腹を引っ込めて押し込んだ。

「おたくは三人だけなの？」

男は式服のポケットからスーパードロングサイズのモアをだしてくわえ、百円ライターで火をつけた。
「あと三人いるんだけど、別の現場に行ってるんです」

良太郎は鼻クソをほじり、指で軽くまるめて色彩を調べ、ジューパンの尻にこすりつけていた。ぼくは蛇口につながっているゴムホースを握り、福田君の方に向けた。福田君は左手首に巻いたサポーターを濡らさないよう、注意して洗いはじめた。

「商売繁盛だ。けっこうけっこう、アハハ」

男が目を細めて、茶色の紙で巻いた細身のタバコを指に戻し、金歯を光らせたとき、
「あなた」

路地に夫人が現われた。五十歳ぐらいで、笑うと、ややたるんだ頬の右側に笑窪ができた。「お葬式に遅れますよ、オホホホ」

「そうかそうか、アハハハ」

二人は肩をならべて歩きはじめた。

「お茶は縁側に用意してありますからね」

夫人は振り返ってぼくたちにいい、笑い声をたてながら歩き去った。

「どういう人が死んだんでしょうね」

福田君がふきだした。

良く磨込まれ、木目が浮きでた縁側に行くと、四角いおぼんの上にモリソバが三枚と、日本茶が用意してあった。

「ザルソバだ！」

福田君が肩をおとした。

「モリソバだよ」

ぼくは訂正した。

「ザルソバのモリソバだ」

「ザルとモリの違いがわかるかね？」

良太郎が訊いた。食べ物の前にして、口を話すために使うのは、要するに、食べたくないということだった。

北海道出身の福田君と、九州出身のぼくがソバに興味ないのはわかるとしても、東京のど下町、深川生まれの良太郎が嫌いなのは不思議といえ不思議だった。もっともぼくの場合、ソバを見ただけで蕁麻疹がでる二人と違い、カケソバなら鼻をつまめば何とかなった。でも、冷たい、かさかさしたモリやザルソバだと、喉に引っかかってどうしても胃に落ちない。

「困ったな」

ぼくがいうと、良太郎と福田君は顔をしかめてうなずいた。

屋根屋の仕事は重労働なので、腹もすくだろうと家主は思うらしいが、実はそうでもない。ぼくたちが勤めている、鈴木重工業有限会社は朝八時三十分にはじまる。

たいていの場合、九時頃までお茶を飲み、トラックやライトバンで現場に出かけて十時にお茶。そんなわけで午前中は仕事にならない。十二時から一時まで食事をして三時にお茶。つまり、二時間前に食事をとったばかりなので、カラッ茶の一杯もあれば十分なのである。

「どうしますか？」

福田君は左手のサポーターを捲り、時計をチラッと見てもとに戻した。

屋根屋の仕事は腕時計が傷だらけになる。だからぼくも良太郎も安物をしていただけだが、福田君の一点豪華主義のローレックスだった。去年の誕生日、奥さんからプレゼントしてもらったらしくて、

異常なくらい時計に気を使い、サポーターでしっかり保護していた。

「せっかくとってくれたんだもの、食べないと悪いしなァ」

ぼくがため息をついたとき、

「食べたことにして捨てちまおうぜ」

突然、良太郎の灰色の脳細胞がひらめいた。

「なら、今のうちだ」

ぼくは周囲を見まわした。福田君はもう一度サポーターを捲って時間を確認した。

縁側に続く薄暗い居間で、蛍光灯が淡い光りを放ち、人気はなかった。一瞬、ここが神田だということ忘れてしまいそうなくらい静まりかえっていた。遠くでパトカーのサイレンが聞える。

「どなたかいますか？」

福田君が縁側にあがり、四つんばいになって居間に入り、茶簞笥の横の新聞をとって、「これもらいますね」

誰にともなくいつて尻から戻ってきた。

ぼくたちは新聞を開いて、モリソバを移した。

「待て待て」

良太郎がニキビの跡だらけの顔をほころばせて、ソバを二本ほど容器に戻した。「リアリティの問題ですよ」

「さすが、良太郎さん！」

「そんなことで誉めるんじゃない。また特許をとるといいだすぞ」

ぼくは福田君に片目をつぶってみせた。

実際、良太郎・エジソン氏は楽器に関する特許を七つほど持っていた。米、英、独に特許を申請中

だったが、その費用ですっかり貧乏になっていた。とりあえず、もっと簡単なものを発明してみた
ら？ とぼくたちはいうのだが、いやア、男のロマンですよ、とにやにやするばかりだった。

福田君は自分の容器にもきりげなくソバを一本置いた。ぼくも真似をし、顔をあげると、良太郎は
ワイセツとしかいいようのない口髭に短いソバを付け、頬にもくっ付けていた。

ぼくが壺のソバツユを、根元を雑草で覆われた南天にかけようとする、と、

「待て待て」

良太郎はわけしり顔で、「どうするんだ？」

「捨てるに決ってるじゃないか。ソバをきれいにたいらげて、ツユだけ残ってたらまずいだろ？」

「ツユを入れる容器が乾いている」

良太郎はのっていた。「こうなったら完全犯罪でいきやしょうや」

良太郎は化学の実験でもしてるかのように、壺のツユを容器に入れ、多すぎる分は戻し、新聞紙の
上のソバの山から何本かとって引きちぎり、いかにもそれらしく容器の縁に引っかけた。それから、
おぼんにもツユを振りまいて、ネギを少量落して目を細めた。

「どうだ？」

「うーん。リアリティはあるけど、あまり上品な食い方とはいえないなあ」

「そこのネギをもう少し左に寄せたらどうです？」

福田君が目を細めた。

「こうか？」

「もう少し左」

「こう？」

「そうです。空間がしまった」

「なるほど。さすが元デザイナー」

良太郎はさかんに感心した。

「いいな、諸君。証拠物件Aを廃棄処分にするぞ」

二人の同意を得て、ぼくが壺のツユを南天の根元にかけてとき、玄関の戸が開く音がした。福田君はソバを包んだ新聞を素早くまるめて、ビニールのゴミ袋に入れ、道具箱の下段に隠した。

ぼくたちがお茶を飲んでいると、居間の襖が開いて夫人が現われた。

良太郎が満腹したといわんばかりにゲップをした。どこで仕入れたのか爪楊枝まで使っていた。

「お味いかがでした？」

夫人はぼくたちに笑いかけ、茶箆筥のあたりで立ちどまって周囲をながめた。

「うまかったです」

「ツユが絶妙でした。年季の入った味ですね」

ぼくは唇のまわりをなめた。

「よかったわ」

夫人は首を傾げて、「今朝の新聞どこに置いたかしら」

「どなたが亡くなったんですか？」

福田君は聞えなかったふりをして訊いた。

「主人の勤め先きの方なの、オホホホ」

夫人は笑いながらやってきて、縁側に座った。

「仏様は御近所に住んでらっしゃったんですか？」

あやうく、御柴転おめでとうございます、といいそうになって、ぼくは訊いた。

「ええ。横山町なの、オホホホ」